

「武家の書状を読む」解説

1 高橋家文書について

- ・総点数198点（御用留、岡部藩家中分限帳など）
- ・高橋家は岡部藩士の1人で、天保～弘化年間には、藩領の三河国半原（愛知県新城市富岡）で元締衆になっている。慶応4年（1867）の分限帳では、40石3人口（扶持）を給せられている。

2 岡部藩安部家について

- ・安部家は戦国時代には大名今川家の家臣であったが、今川家の滅亡後は、徳川家康に従った。安部信勝は、天正18年（1590）に徳川家康の関東入部に伴い、武蔵国・下野国で5250石余を知行、武蔵国榛沢郡岡部村（現深谷市）に陣屋を置いた。寛永13年（1636）に三河国八名郡の内に4000石の地を加えられた。慶安2年、摂津国に10000石の所領を加増されて大名に列した。
- ・所領が武蔵、上野、三河、摂津、丹波の五か国にわたり、石高は総計2万252石1斗であった。所領が大きく関東、東海、畿内に分かれていたため、江戸屋敷のほかに関東は岡部、東海は半原（現愛知県新城市）、畿内は桜井谷（現大阪府豊中市）に陣屋を設けてそれぞれの所領を管理した。
- ・所領が分散し、陣屋も3カ所に分かれているため、元禄期に書された大名の資質や藩政などを記した『土芥寇讎記』では、大坂瓜生に置かれた陣屋をもって瓜生藩とも称されていた。安部信賢の時代に岡部陣屋が居所と定められた。慶応4年（1868）には半原への藩庁移転を新政府に受理され、半原藩として明治時代を迎えた。

3 テキスト

【概要】

本書状は大きく2つの内容に分けられる。冒頭に時候の挨拶文と出所、充所。後段に近況の報告となる。

後段のなかで大きな内容を占めるのが、11月4日・5日に発生した大地震についてである。各地の被害状況など細かな情報がもたらされており、特に岡部藩財政を賄っていた大坂や藩米の取引地であった丹波の状況について多くが述べられる。9月に来航したロシア船による市中不安が冷めやらぬうちに発生した地震とそれによる津波によって市中は更なる大混乱となったこと、藩米売却のための出張が延期となったことなどが綴られている。

【用語】

- ・井上八十八…諱名は春枝。天保14年（1843）から桜井谷陣屋代官を勤めた岡部藩士。
- ・高橋忠右衛門…諱名は篤議。元は鍬五郎を通称とし、天保10年に忠右衛門に改名を願い出た。天保13年より半原陣屋代官を勤めた。
- ・猪野新右衛門…諱名は敬徳。安政4年（1857）時には半原陣屋にて代官を勤めていた。

- ・丹州御米払…岡部藩の所領があった丹波の地は米の名産地として高く評価されており、高値で取引がなされていた。岡部藩ではこれらを入札にかけて売り払い、藩財政を賄っていた。
- ・心組…かねてからの心の準備。心構え、心積もり。

4 古文書読解のワンステップ

本書状は、月日のみで年が記されていない。そのため、解読者が自ら年次を推定する必要がある。そのためには文中に登場する次の事柄が年次を絞っていくための大きなヒントとなる。

- ・出来事…文中に登場する史実（事件、事故、災害など）
 - ・「当月（11月）四日五日兩度大地震」
⇒安政の大地震
 - ・「九月中大坂天保山沖へおろしや国船一艘」
⇒プチャーチン提督率いるロシア船ディアナ号の来航。
- ・人物…文中に登場する人物の生没年。
 - 『藩中家譜』（池田氏収集安部家文書）…藩士の事跡履歴書。
現存するのは10冊。途中に欠落があり、寛政2年～文政12年（1800～1829）、天保10年～弘化4年（1839～1847）、安政4年～慶応元年（1857～1865）が残る。
 - ・井上八十八…弘化4年時35歳。文政12年間から岡部藩に仕えること19年、桜井谷代官在任5年目。
 - ・高橋忠左衛門…弘化4年時33歳。文政12年間から岡部藩に仕えること19年、半原代官在任6年目。
 - ・猪野新右衛門…慶応元年時48歳。天保5年から岡部藩に仕えること32年。嘉永2年（1849）から17年間に渡り、半原代官職を勤めた。
- ・干支・閏月…干支は12年で一巡。十干十二支の組み合わせると60年で一巡。暦と一年の実際の長さとのズレを調整するために設けられた閏月（2～3年に一度設けられる）の配置もヒント。 ※本書状には登場しない。